

H23.3.11 津波に襲われた日

宮城職業訓練支援センター 平山 隆次

1. 地震発生 奇跡的に助かる

平成23年3月11日、仙台公共職業安定所のあるビルの5階に宮城センター（現：宮城職業訓練支援センター）の仙台事務所があり、その会議室で外部の委員の方々をお呼びし会議を開催し、それが終了したその時に大地震（東日本大震災）が発生した。

ビルは大きく揺さぶられ、立っているためにはかなりバランスを取らなければならなかった。間もな



く停電のため電気が消え、薄暗くなった会議室で一向にやむ気配のない揺れを体験していた。その揺れは過去に経験したことが無いもので、少し治まったかと思うとまた大きな揺れとなり永遠に続くかと思われるほど長い時間が経過した。

ひとまず揺れが落ち着き、どんな状況なのかを把握しようと周りの方々と情報交換し、ようやくどんな地震だったか分かった。「宮城県北部が震度7」震度7というのはいったいどんな地震なんだ？聞いたことの無い数字、しかも時間が長かった。

とにかく施設の状況が気になり多賀城のポリテク



センターに向かうこととし、地下の駐車場から公用車を出し、多賀城（仙台港）に向かった。

車中で、他の人の携帯電話で映像を見ることができた。映画の一場面のような画像が流れていた。大型の漁船が横倒しになり浜に打ち上げられていた。これは凄いことだと画像を見て考えてはいたが、実感が無いというか地理的な関係を理解してなかったのか、そのまま多賀城（仙台港）に向かって行った。

停電のため信号機は機能せず道路は大渋滞であった。途中、住んでいるアパートの横を通る時何となく「もう帰れない場所」みたいな感じがして、変に思いながらも進んでいった。





ちょうど仙台港の交差点で渋滞のため停車した。大きな十字路の交差点で、「まだまだセンターまで時間がかかるな」と思った瞬間、右側の道路から土ぼこりを立てて小さな角材を伴い水が流れてきた。えっ？何？と考えた時、ものすごい勢いで大きな黒い波が流れてきた。「これは早い！」車をバックするにも渋滞で後ろが詰まっているため、思うように動きが取れない。じたばたしているうちに波が車を持ち上げた！「これが津波か！」それからは波に任せるしかない、どんどん流されていく。交差点からどんどん遠ざかっていく、見ると交差点を海側から反対方向へ大型の観光バスが高速道路を走行している速さ並みのスピードで流されていった。

この場面映画で見たな、でも映画は特撮で作ったもの、これは現実の光景、映画より凄いなと感じた。自動車に乗ったまま水に浮かび流されるというのは、気持ちのいいものではない。遊園地のアトラクションに似たものはあるが、それは経路が決まっているもの、今はどこに行くか全く分からない。その時、車が大きく傾いた、何が起きた、岩だ！車が



歩道わきに造園のために置かれている岩に乗り上げたんだ。これが幸運であった、助手席側が岩に乗り上げた拍子に水面から外に出た。すぐにドアを開け外へ。

外に出た瞬間に大波が押し寄せ私を含めて3人が流された。波の高さは身長を超えただ流されるまま、しばらくすると渦の中に巻き込まれ、周りからは波に浮いた車がどんどん押し寄せてくる、これらの車を手で押しつけて何とかトラックの荷台に登り波からは逃れることができた。

さっきまでいた道路を見ると渋滞していたはずの車が見当たらない。代わりに歩道の植え込みや岩に乗用車、トラック、コンテナ等が重なっていた。

自分たちの乗っていた車は姿さえ見えないほど上にトラックなどが積み上がっていた。これが現実か？流されていた瞬間は「死」さえ意識したほど、尋常な出来事ではなかった。その日は3月なのに雪がちらつく寒さの厳しい日で、トラックの荷台から近くの会社の事務所2階に避難させていただいて一晩凍える思いで過ごした。

2. 瓦礫処理 復旧作業

何とか助かることができたが、これからが大変であった。多賀城の施設を見て呆然とした。2mを超える波がセンターを襲い、駐車場の全ての車は流され、代わって海側の工場からコンテナ、原木、材木、高圧ボンベ、トランス、他が敷地内に積み上がり、まっすぐ歩くこともできない。さらに中へ入ると1階の全てのものがヘドロまみれで惨憺たる有様である。1階部分で助かったものは全く無い。工作機械類を始め実績を上げてきた機器全てがだめになっている。

震災後、訓練は全くできない状況でやれることは、「瓦礫処理」「使用可能な教材、機器、工具の救出」「危険物の撤去」である。

「瓦礫処理」といっても全て人力でやるしかなく、まず手始めに人が通る通路の確保から。津波で流されてきたヘドロが分厚く床に堆積しており、スコップで何度もかき取らないと床面が見えない。悪臭と

有害物とで工業用の防塵マスクをしなければとても作業できない、しかも海水がヘドロのため流れず溜まっているため足元が滑りやすく、軍手はすぐに使えない状態となる。施設内は電気が使えないので薄暗く、しかもありとあらゆるものが津波で流されグチャグチャなので慎重に作業しないと怪我をしてしまう。



通路だけでも通れるようにするためには、ヘドロ、倒れた自動販売機、玄関部分にあった泥取りマット（ヘドロまみれのためかなりの重さになっている）を取り除くのに大勢の力が必要となった。毎日この作業の繰り返しが続く。肉体的にも精神的にもヘトヘトになりながら瓦礫処理を続けていった。業者の方々の手もかりて本館だけは瓦礫処理が終わった。



3. 仮施設での訓練再開へ

このころになると、仮施設で訓練を再開する話が出始めて少し先が見えてきた。毎日、出口の見え



ない洞窟にいるようで目的や目標が見えず、作業への意欲も消えかけてきたころなので救われる気持ちがあった。

それからは、訓練施設としての本来の業務である訓練計画の立案、訓練機材の調達、訓練担当の調整などが始まり、施設全体がようやく活気を見せるようになった。その後、仙台のオフィスビルで3コース、しばらく時間をおいて東北本線館腰駅（名取）そばの仮設実習場で6コースの訓練を開始し、訓練生が集まる施設として動き出した。名取の実習場は、ものづくり分野として、機械加工、金属加工、設備保全、電気設備、電気通信、建築施工を実施し、



名取市内では初めての公共職業訓練施設として運営を始めた。

名取実習場は、既存の建物を改修した部分と新規に整備した部分とから成り、最低限の訓練施設としての機能を準備した状態で、多賀城のセンターと比較するとかなり劣った部分が多い。訓練生が十分な訓練スペースや休憩スペースの無い中で、一生懸命訓練に取り組んでくださっていることが救いに思える。



4. おわりに

今回、「震災復興と職業訓練の取り組み」としてお話をさせていただいて、最後にお伝えしたいことは、人と人とのつながりの大切さをつくづく身にしみて感じたことと、極限状況での人の行動がその人の本来の姿を示すものだということを痛感したことである。

震災発生時、津波に流された時、もし一人であったら生きる努力をあそこまでしたのだろうか、と今になると考えてしまう。「何とかみんなで生きぬかなければいけない」「もう一度家族に会いたい」と気持ちを奮い立たせた。すべて誰かのことを考えてできた行動だと思う。昔の映画の一シーンで主人公が言っていたことが本当の意味で理解できた。だからこそ人との関わり合いを大切にすべきだと改めて自分に言い聞かせた。

また、これほどの未曾有の災害に見舞われた時には、平常では繕っていたものは、全てはぎ取られ本



来のその人の持つもの「本性」が見えてくる。壊滅状況となった職場をただひたすら片付け、何とかしたいと毎日くたくたになるまで作業をした指導員、職員、通常の業務の中で接していただけでは分からないその人となりまで感じ取れる、そんな関わりを感じた。

あの大震災は、経験すること自体低い確率の体験ではあるが、その大震災を経て「人とは」「仲間とは」を改めて考え直すことができ、さらに生きていく中で大事なものは何なのかを理解できたような気がする。

お忙しい中、お読みいただいている方々に、被災地に対する多くのご支援を心より感謝申し上げますとともに、私どもは、今後もできることを着々と進めて参る所存でございますので末長くよろしくお願い申し上げます。